

49 江戸期本草家の北陸への関心 (三)

—野呂元丈の越中国での足跡—

正橋 剛 二一

保十六年四月、植村左平次による信濃・越後・越中・飛騨・美濃・尾張の調査だが、今回はこのうち元丈らによる第一回目について述べたい。

野呂元丈（一六九三—一七六一）には『北陸方物』という著書（大西源一『野呂元丈伝』大正四年刊）があつて、おそらく元丈自身による採薬記と思われるが、本書は今杳々として所在が知れない（もしご存知の方はぜひ御教示を乞う）。ところが幸い、一行を受け入れた地もにはこれを裏付ける史料二件があり、おぼろげながらも元丈の越中国調査の片鱗をうかがうことができる。

史料一『薬草御用一卷留』（墨付三三丁）

享保七歳寅八月 新川郡内山村 平三郎

史料二『越中物産記』（墨付一一丁採色画）

享保七年 御医師様方薬草絵形ニ被仰付候写 新川郡

米田村勘左衛門、東尾崎村次郎左衛門、中市村三郎右

衛門、下金剛寺村惣右衛門、中野嶋村五右衛門（五人連

名）

右の二件である。

江戸幕府八代將軍徳川吉宗の業績として享保の改革が有名で、この実施には和歌山藩出身の家臣達が重用された。諸施策の中に、金銀の海外流失を防ぐため薬種の国産化も重要項目となっており、本草家を採用して広く国内の薬草調査が開始された。手始めには、享保五年、丹羽正伯・野呂元丈により伊豆・相模・箱根が調査され、前後して植村左平次（三人とも和歌山藩領伊勢の出身）が加わり、以後延享三年まで合計四十二回（うち享保期十五年間に三十七回）にわたり幕府採薬使が各地に派遣された。

このうち越中国の調査は二回である。第一回は享保七年六月、野呂元丈、夏井松玄、本賀徳運、長井丈庵、玉置良順の五人による上野・越後・佐渡・越中・飛騨・越前・近江（妙高山・立山・白山を含む）の調査、第二回は享

史料一は小さな帖仕立（八×一七・五センチ）の手控と

思われ内山村松平家に伝わった。筆者平三郎は松平家の先祖であろう。代官鈴木小右衛門(加賀藩士、二人扶持)

以下、山案内才許、葉草見習人(米田村勘左衛門、東尾崎村次郎左衛門、中市村三郎右衛門、中ノ嶋村五右衛門、大家庄村孫兵衛、但立山迄之時ハ孫兵衛指除、下金剛寺村宗右衛門罷出申はつ)人足裁許、山小屋諸事裁許、ほか筆記人、鎌・欽・ツルハシ持ち、葉草掘り、駕籠昇き、人足に至るまで、動員総数数百人に及ぶ役割分担と人数、諸道具員数等が記載されている。おそらく、採葉使派遣が幕府から通達された加賀藩庁で対応が検討準備され、この段階で領内各地に準備方が下達された文書の写しであろう。ここでは動員された人数の大規模なのに驚く。採葉使一行はおそらく数十人規模の隊をなして進んだと思われる。本書には一行の日程、道順の記述なく、採取した葉草名も書かれていない。動員された人々の住所から、調査は領内全域に及んだと推定される。右記葉草見習人の名に注目すると、この人達が次の史料二を作成した人達であることが判り、末尾の孫兵衛が宗(惣)右衛門に差替えられたこともわかる。

史料二は加賀藩主五代前田綱紀の遺品すなわち『松雪公御手沢遺書』の第五冊中に含まれるもの。十六種の山草が彩色して描かれ、葉効についても言及し「葉種ニハ実ヲ用」「葉ノ如クニ相見ヘ候内ニ実有之」「薄荷之由内山覚中申候但草種ニハ葉ヲ用」等と書かれている。採取地を特定できないがここに収載された葉草は遠志・穀精草・菟絲子・升麻・黒三稜・藜蘆・淫羊藿・海桐皮・北五味子・沙参・メグサ・節人参・黄連・蒼朮・ヤマコブシ・人参類の十六種である。葉草見習人達はおそらく本書を添えて藩庁へ報告し、この『越中物産記』はおそらく綱紀の手もとまで届けられたのであろう。綱紀は稻若水を召抱え、『鹿物類纂』の編輯にあたらせた人物である。

(関白雲会呉羽神経サナトリウム)